

## 序

或る人が「バルトの神学はもう古いですよ」と言いました。私はこの人に、「ルターやカルヴァンはもっと古いですよ、否、聖書は更に古いですよ」と応えたいと思います。神学の古さ、新しさは、新聞や週刊誌とは違って、それがどれだけ事柄に迫っているかという点にあると思います。ですから私たちにとって大切なのは、「バルト神学は今日のわれわれに対して何を語るのか」ということです。私はこれを「バルト神学から現代を問う」と題して、考えてみたいと思います。

### I 始めから始める・・・「神、語り給う」

ヨハネ福音書は「初めに言があった」(1:1)と記し、また創世記は神の言葉による創造を記します。永遠に新しい神の言葉、この「語りかけてくる神」からバルトは神学を始めます。彼は抽象的・観念的でなく、社会的・政治的な状況連関の中で神学的思索をなし、そこから神学が状況を開示し、理解せしめ、また状況を切り拓く道を示します。まさしくこの点において、カール・バルトの神学は現代においても、私たちに語りかけてくるのであります。

バルトの神学は初期には「神の言葉の神学」と呼ばれました。すなわち、バルトは『教会教義学』の序論である第一巻に「神の言葉についての教説」という題をつけています。これはバルトの神学が「神、語り給う」ということから出発することを示しています。

「神、語り給う」とは神の啓示を意味し、神の啓示とは端的にイエス・キリストを指します。そして、この啓示の証言として「聖書」について、またこれに基づく教会の「説教」について論じます。このようにして第一巻が展開されていきます。

バルトが『教会教義学』を「神、語り給う」から始めるということは、私たちの信仰の在り方に関しても語っているのであります。神学が「神、語り給う」から出発するという点について、バルトはゲッチンゲン大学に招聘されて初めての講義においてこう述べます。「神が彼（人間）にすでに答えを与えているのでなかったら、彼（人間）は神を問わないであろう。まさにそれ故に（神が答えを与えているが故に）、神を問うことを避けることも、何らかの意味で免除することもできないのである」（注1）。すなわち、バルトは、問いがあるということは既に答えがあるということだ、と言っているのです。すなわち、神が問うから、人間は応答し、また応答的に問うのです。バルトの思考の方向は、「神が問い、人間が答える」という方向です。普通には、一般的には、宗教は「人間が問い、神が答える」という方向で思考します。すなわち、人は困難にあつて、また危機的な状況にあつて神に問い、助けを求めらるでしょう。「神様、どうしたら良いでしょうか。神様、助けて下さい」と。そしてまた、これに応じて宗教は答えを見出さねばならない、と言うのでありましょう。確かに神は人間と共におられ、人間の困窮と祈りを見捨てることはなく、答えを与えて下さるでしょう。しかし、バルトはそれ以上に、「神が問い、人間が答える」という関連で状況を見、神学するのであります。すなわち、困窮の中でどう祈っているかも分からない私たちに向かって、神は語りかけ給うのです。「わたしはここにいて、わたしはここにいて、あなたと共にいて」と（参照、イザヤ六五：一）。だから、「立ちあがれ」と問いかけてくださいます。カオスの中で神不在を嘆く私たちに向かって、「わたしはあなたと共にいて、あなたは何処を探しているのか、何をしているのか」と問いかけ、私たちが自分の全身で神に答え、神に従って歩みだす力を与えてくださるのです。

ここにおいて、私たちの信仰の在り方が考えさせられます。すなわち、信仰の前提は人間の側の求めにあるのではなく、神の語りかけにあるということです。ここからバルトの一般的な宗教理解に対する批判がなされます。それは、「苦しい時の神頼み」式の宗教に対する批判です。このような宗教においては、結局は、主語は人間なのです。人間の要求を満たしてくれるのが、「効き目の

ある神様、仏様」ということになりましょう。そうなると、フォイエルバッハの宗教批判が正当にも示しているように、神とは人間の意識の投影に過ぎない、「神学とは所詮は人間学に過ぎない」、ということになってしまいます。これを踏まえて、バルトは、信仰は「神、語り給う」という神の言葉から始まると主張するのであります。そしてこの神の言葉は中空にただよっているのではなく、現実性を持っています。すなわち、神の言葉はイエス・キリストにおいて出来事となったのであり、聖書において証言され、教会において宣教されるのであって、ここに神の言葉の現実性があるのであります。このような思考の仕方にバルトの神学思想の革新があるのであります。バルトはイエス・キリスト、神の言葉から神学的思考を始めることによって、いわゆる自然神学から脱却するのです。そして、シュライエルマッハー以来の十九世紀プロテスタント神学において神学の前提を人間の絶対者への依存感情や宗教意識、或いは信仰心や宗教体験に置くことに、バルトは反対するのであります。

## II 神の言葉、イエス・キリスト

「言は肉となった」(ヨハネ1:14)とあるように、神の言葉はイエス・キリストとしてこの世に現れました。バルトは晩年に、「恵み」という概念ではなく、このイエス・キリストの名こそ自分が語るべき最後の言葉である、と述べています。この言葉が示しているキリスト論的集中こそがバルトの神学的思考の魅力であり、またこれこそ、「バルト神学はもう古い」という声にもかかわらず、時を経ても古びることのないバルト神学の新しさです。何故なら、「知解ヲ求メル信仰」が神学的思考の出発点なら、神学的思考は信仰の内容であるイエス・キリストに基づいて展開されるのが最も相応しいからです。

では、イエス・キリストにおける神は、先ず初めに、何をなしたのでしょうか。これについてバルトは、神は人間と世界の創造に先だって、初めに、予め自己決定をなしたと語ります。これは永遠の決定であり、神がご自分を人間と結び付けるとする「契約」の決定です。すなわち、「我は汝らの神となる、汝らは我が民となるべし」という契約であり、これは絶対主権的行為として神の人間に対する約束・契約です。この契約内容は「恵みの選び」とも言われます。これがバルトの予定論です。これによって示されているのは、第一に、神は人間と契約を結ぶという点において恵み深くあるということ、第二に、この恵みは神の自由な行為であって、神は自由に人間を契約相手に選ぶということであり、

バルトは『教会教義学』で、神論におけるこの予定論から、大いなる神と人間のドラマ、大いなる物語を展開し始めるのです。そのストーリーはこうです。神は永遠の初めに、神自身が人間の神となり、人間は神の人間となるべし、という決断をされました。これは「契約」と呼ばれます。これは未だ見ぬ人間に対する神の自己決定です。これを実現するために、神は契約相手の「人間」を創造し、また契約の歴史の舞台として「世界」を創造されました。ですから契約が創造の「内的根拠」であり、創造は契約を現実のものたらしめる、謂わば「外的根拠」であります。

神はこうして創造された人間を、その代表としてのイスラエルの民を、恵みをもって導かれます。神は契約に従ってこの民の神であろうとされましたが、しかしこの民は神の人間であろうとはしませんでした。この民は預言者たちの警告にもかかわらず、神の契約に従いませんでした。それにもかかわらず、神はこの契約を破棄せず、この契約に留まり、この契約を成就しようとされます。契約の成就是イエス・キリストにおいて起こります。すなわち、契約の成就是、神がイエス・キリストの十字架と復活において、人間の罪と死を神自身のものとなし、神自身の恵みと命を人間のものとするという、驚くべき「交換の出来事」、つまり「和解」の出来事が起こったからであります。ですから、和解の前提は人間の罪ではなく、神の契約であり、和解が契約の成就であります。この和解の出来事において教会が基礎づけられ、キリスト者が起こされ、神の国へ向かうキリスト者の歩み、つまり終末論的倫理が方向づけられるのであります。このようにして、神論・創造論・和解論として、大いなる神と人間のドラマが展開されていくのであります。このような展開においてバルトは神学思想の革新をもたらしたのです。すなわちプロテスタント神学において伝統的な「律法と

福音」、「律法・罪と福音・贖罪」の理解の方向転換をもたらしたのであり、またカルヴァンの二重予定説を恐怖の決定として批判して、むしろ「福音の総計」であると革新したのであり、更に教会と国家に関する伝統的な二王国論から「キリストの主権」の下での教会と国家の関係の理解へと変革したのであります。

このような展開を通して、バルトの神学的思考は今日なお何を言おうとしているのでしょうか。それについて、一つのことを指摘したいと思います。それは、「神の意志とは何か」についてです。バルトはイエス・キリストにおいて「神の永遠の意志」が示されている、と言います。イエス・キリストの他に、またそれと並んで、更に他の出来事や力、現象や真理を、神の意志の啓示として承認し得るとか、承認しなければならないとかいうことをバルトは退けます。そしてイエス・キリストにおいて神は人間に第一のこと（恵みと命）を与え、しかし神自身には、第二のこと（罪と死）を与えようとされました。それは、「神によって造られ、神から墮落した人間のために、ご自身を犠牲として与えようとする神の意志」であります（注2）。この神の意志決定から、神の人間との歴史が始まるのであります。私たちは神の意思決定をイエス・キリストの現実性から離れて、直接的に、歴史的出来事や現象と同一化してはならないのであります。

報道によりますと（CNN 22.10.8.）、ロシア正教会最高位のキリル総主教は70歳の誕生日を迎えたプーチン大統領を称賛して、プーチン大統領はロシアを統治するよう神によって定められていると主張しました。彼はプーチン宛ての書簡で「神があなたを権力の座に就かせた。国と国民の運命にとって特別重要で、大きな責任を伴う職務を果たせるようにするためだ」と述べているのです。また、ウクライナとの戦争で死亡したロシア兵は全ての罪を清められる、とも発言しています。すなわち、或る日の礼拝で、ウクライナ戦争で多数の死者が出ている現状に言及して、「・・・戦争で殺し合う兄弟が1人でも少なくなるよう、教会はこの戦いが可能な限り早く終わることを祈っている」と述べる一方で、或る人が天命に従い義務を全うしている中で、「もし義務の遂行中に命を落とした場合、間違いなく犠牲に等しい行為になる。他人のために我が身を犠牲にしているのだ。こうした犠牲により全ての罪が洗い流されるものと確信している」と説きました。この発言に先立って、プーチン大統領は30万人以上の徴兵を目的とした国民の動員を発表し、ウクライナ侵攻をエスカレートさせていますから、キリル総主教はプーチン大統領の発表を後追いついた形で、宗教的な保証を与えたとも受け取られるのであります。

### III 和解の出来事

マルティン・ルターは、罪人が神に義とされるのは律法を遵守するという行為・業によってではなく、ただ信仰によってのみであると主張しました。「信仰義認」が宗教改革の合言葉でありました。ただしこれは注意しなければなりません。罪人は行いによっては罪が赦されないのなら、その代わりに心で信じたら良いのか、ということではないでしょう。嘘つきが、「私は嘘をつきません」と言っても誰も信じないでしょう。嘘つきは先ず自分が嘘つきではないことが認められねばなりません。このように、罪人は先ずイエス・キリストによって義とされねばなりません、そしてそれに基づいて、自分が義とされたことを信じるのが許されるのであります。バルトはルターの「信仰義認論」には根底に「キリストによる義認」があるべきだと主張します。またルターの「義人にして罪人」という定式化に対しても、両者は同等でなく、「罪から脱却して義へ」という方向性が示されるべきことを強調するのであります。

バルトによりますと、イエス・キリストは死人の中から甦り、全ての人間の和解者として御自身を証示されました。彼は「世の光」となり、全ての者への言葉、真理とされました。イエス・キリストの復活は「法的ニハ」(de iure) 全ての人間のための出来事なのである。しかし「事実上ハ」(de facto)キリスト者によって、「我々ノタメ」(pro nobis)の出来事、従って「私ノタメ」(pro me)

の出来事として認識されました。

バルトは一貫して、この救いの普遍性を、つまり救いが「教会の壁」の外に及ぶことを主張しています。例えば、或る年のクリスマス説教において次のように述べています。長いですが引用しましょう。

『見よ、私は、すべての民に出会う大いなる喜びを、あなたがたに告げる』。神は、教会に行かない人のためにもありたもうのか？ 然り、そのような人びとのためにも。『敬虔一徹』のためにもか？ 然り、彼らのためにも、それは彼らがとりわけそれにふさわしいからではなく、彼らもまた人間なるがゆえである。いろいろ非難されるべき者、おそらく隠れたところに自ら非難すべきところを、さまざまに持つ者のためにもか？ 然り、まさにそのような人びとのためにもである。同じく、共産主義者のためにも、今日とりわけ重大なナチス主義者のためにも、『アリソン』(ヒトラーのこと)とそのともがらのためにもか？ それをもち出しても何の役にも立たない。答えは同じである。彼らのためにもである。」(注3)。

このように救いの福音は全ての人に及んでいます。そして全ての人には自由な主体として和解の証人となるように召されているのです。この和解の業を認識し、信仰と愛に生きる人がキリスト者であり、その認識が未だ起こらず、従って信仰と愛が未だ起こっていない人が非キリスト者、否、未キリスト者であります。このような区別は確かに存在します。

キリストの和解の出来事は、「わたしたちがまだ罪人であったとき」(ローマ5:8) 全ての人間のために起こり、この点にキリスト者と非キリスト者の共通点がありますが、前述したように相違点があります。キリスト者は、自分の命がイエス・キリストに基礎づけられているという「出発点」と、全世界が和解の事実を認識し、また神の国において完成するという「目標」とを知っています。そしてこの出発点から目標への途上にあつて、さまざまな問題・困窮・苦難を、この世が未だ見ぬ先に見出し、この世とは違った仕方では捕え、これらを相対化し、課題として担い、また乗り越える勇気を与えられているのです。キリスト者は自分の命を自己目的とするのではなく、「召された者たち」として生きます。この召された群れとしての教会は、伝道、牧会、ディアコニア、教育、交わり等の働きを通して、この世において、この世のために、神の国の証人となるべく召されているのであります。

私たちが日本においてキリスト者として生きる時、様々な困難がありますが、その中の一つに緩やかな二元論があります(このことを私は別の所に書きました)。ここで私は信仰と「世間」の二元論を考えています。キリスト者として教会を中心に生きると言いながら、実際には「世間」の空気を生きていないか。或いは教会が小さな「世間」になっていないか、ということです。

「世間」は新型コロナの非常時においてあからさまにその姿が現れました(佐藤直樹著『なぜ、自粛警察は日本だけなのか・・・同調圧力と「世間」』、現代書館を参照)。この時期、日本では他の国ではない自粛警察やマスク警察が登場しました。そして得体のしれない閉塞感や息苦しさがありました。それはどうしてか。佐藤氏によれば欧米にはない「世間」が日本にはあるからであります。世間の目、世間の風、世間の空気、「空気が読めない」、「世間知らず」等と言います。世間は社会とは違います。社会は個人と個人、主体と主体の関係です。社会にはルールがあり、それは法律です。世間には法律はありませんが、しかし世間のルールがあります。その一つに、「みんな同じ」という平等主義があります。「出る釘は打たれる」とも言われます。これは、多数者とは違う少数者への差別、多数意見とは違う少数意見への無視、均質的なものとは違う異質的なものへのいじめ、等として現れます。欧米においては世間ではなく、社会があります。その根底としてキリスト教がある、と佐藤氏は言います。13世紀ヨーロッパ・カトリック教会において告解(独・Beichte, 英・confession)が各人に義務付けられたことによって、「個人」が成立したと。すなわち神の前に我が立つ、「神と我」の関係が先ずある。これを基本にして「我と汝」という個人と個人の関係、すなわち社会が生まれて来るのです。

日本において少数者の群れとして生きる教会、キリスト者は、「世間」に埋没して「世間」の一部

となるのか、逆に「世間」とは無関係に孤高の道を歩むのか、それとも、この両者ではなく、「世の光」として生きるのか、私たちは問われているのであります。

私たちはバルトから、全ての人のために起こった普遍的な和解の出来事を聞きました。神との和解には人間と人間との、人間同士の和解も含まれているはずですが。しかし現在の世界の状況を見ると、和解のメッセージは偽善ではないだろうか、という人がいるかもしれません。和解ではなく分断が、平和ではなく戦争が世界を覆っている今、「正直に考えるならば和解の福音を語るのは誤魔化しである」、と言いたい気持ちになるかもしれません。ウクライナで、ガザで、何千何万の人々が傷つき殺されているのを見ると、「神は何処にいるのか、神は戦争を許しているのか」、と問いたくなるのも偽りのない気持ちです。しかし、このような考えは人間的には、気持ちの上では、正直であったとしても、神の前では間違っています。神の意志は戦争ではなく平和です。私たちが非難しなければならぬのは、私たち自身であって神ではありません。友人のクラッパートから聞いたのですが、第二次大戦直後、ドイツ・ハンブルクの神学者ティーリケがバルトに「われわれは地獄を見ました」と言ったとき、バルト、「それはあなたがたの民主主義が未成熟だったからです」と答えたそうです。神の意志は和解と平和であり、人間の常軌を逸した戦争への意志よりも偉大であります。ですから、私たちは如何なる戦争も正当化することはできません。

ウクライナにおける戦争はどうでしょうか。これは2022年2月24日にロシアがウクライナに軍事侵攻して勃発しました。プーチン大統領は、「ドンバスで起こっていることはまさに大量虐殺である」と発表し、ウクライナ東部に住むロシア人たちをナチス主義者たちから解放するための特別軍事作戦だとして、この戦争の正当性を主張しました。この主張にはいくつかの背景があると言われています。つまり、ソビエト連邦は15の共和国からなっていましたが、これが1991年に解体して、それぞれ独立しました。これと連動してワルシャワ条約機構も解散しました。しかもその中のポーランド、ハンガリー、チェコ共和国はNATOに加盟してしまいました。このような中で、ウクライナまでもがEUへの加盟を進めており、NATOへの加盟も検討していることは、ロシアにとっては危険なことでした。ロシアにとっては、これはNATOの東方拡大という脅威を意味していました。また、8世紀から13世紀までキエフ公国（キエフ・ルーシー）の歴史からロシアとウクライナは元々同じルーツを持つのであり、今両国が一体化するのは当然のことである、という主張もあります。しかしこのようなプーチン大統領の主張は正当化されるものではありません。ロシアのウクライナ侵攻は侵略戦争であると言う他ありません。また一般的に言って、戦争はその目的の故に正当化されるべきではありません。何故なら、バルトが言うように、戦争の本質は「殺戮」以外の何ものでもないのであって、目的を挙げることによって本質が曖昧にされてはならないのであります。

また、パレスチナにおけるハマースとイスラエルの戦争はどうでしょうか。今度に限って言えば、昨年10月7日のハマースによる襲撃事件から始まりました。これは宗教戦争ではありません。ドイツのイスラム中央協議会のメンバーであるムハンマド・サミール・ムルタザ博士は10月23日付の「islam.de ニュースナショナル」において、こう述べています。すなわち、「明白なのは、ハマースは抵抗運動ではないということです。イスラムの基準ではテロ組織であり、標的を絞った方法で民間人を殺害し誘拐します」と。このようにハマースとイスラムとは関係のないことを述べ、むしろ批判します。そしてイスラムとユダヤ教との関係については「兄弟姉妹の関係」を主張します。引用します、「ユダヤ人とイスラム教徒は唯一の神への信仰の兄弟姉妹であり、アブラハムによって結ばれているため、ユダヤ人を攻撃する人は誰でも同時にイスラム教徒を攻撃しています」と。このようにイスラムはハマースを批判しています。

イスラエル政府は10月7日の襲撃事件をテロとしてハマースを非難し、これに武力で反撃し全滅しようとしています。しかし実際にはイスラエルのしていることはガザ地区の破壊であり、罪の無いパレスチナの住民の殺害です。イスラエルの現政権はホロコーストの再来を恐れ、パレスチナを独立した国家として認めようとしません。またパレスチナ人達がハマースの実効支配を容認しているその原因に対して、イスラエル政府は正面から向き合おうとはしません。今必要なのは、即時停戦と

対話による政治的解決、パレスチナとイスラエルの両国家の承認であることは言うまでもないと思います。

教会・キリスト者はキリストの和解の出来事の証人として、この世におけるキリストの平和願い、追い求める群れであります。ローマの格言に「もし平和を欲するなら戦争を用意せよ」という言葉がありますが、教会の呼びかけは、そうではなく、「もし平和を欲するなら平和を用意せよ」でなくてはならないでしょう。教会はこの世において小さな弱い群れであるにもかかわらず、キリストにおいて強く、また希望があります。教会が強いのは、希望の対象であるキリストの力によってであります。そして、キリストに希望をおく者は、この世において、和解の証人としての働きを、確かな確信をもって引き受け、遂行することが許されているのです。それは、「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない」(イザヤ 40:31)、とイザヤが語っている通りであります。

### 終わりに

壮大な『教会教義学』の著者であるバルトは近寄りがたく、威圧的な人柄だと思われがちですが、そうでもなくユーモラスな面がありました。最後の秘書エーバハルト・ブッシュは直接聞いた話としてこのような逸話を紹介しています。五十四歳のバルトが警備兵としてルツェルン湖畔のブルンネンで兵役に就いていた時のことです。歩哨に立つ時間の都合で昼食時間に遅れて食堂に入りました。その日はスイスの軍隊食で人気のある「雀のスープ」と呼ばれている肉団子スープだったので、お鍋から掬って一息に食べてしまいました。空腹が治まらないのもう一度お鍋をかき回してみたら、もう一つ肉団子があったので、それも食べてしまいました。その直後、食堂のドアが開き、もう一人の兵士が更に遅れてやって来ました。ところが肉団子はもうありません。「誰が僕の肉団子を食べたのだ」と叫びました。バルトは恥ずかしくなって、俯いてしまいました。しかしその夜、チョコレートを持って眠ろうとしていた兵士の所に行き、「あのう、肉団子を食べてしまったのは僕だったんだ・・・」と謝ったそうです(注4)。これをみるとバルトは決して超人ではなく、普通の人だったことが分かります。それだからこそ、なお更、現代の私たちにも希望と勇気を与えるバルトの神学の偉大さを思わざるを得ないのであります。

### 注

- 1 この1924年になされた教義学講義は『キリスト教の訓育』と題されている。引用は次から。Unterricht in der christlichen Religion, Erster Band: Prolegomena, 1924, TVZ, 1985. S. 82.
- 2 バルト『教会教義学』の『神論II/1』、292頁。
- 3 バルト『しかし勇気を出しなさい』(佐藤司郎編・解説、日本基督教団出版局、2018年)の48頁以下に収録された1938年『スイス日曜新聞』クリスマス号の説教「最後の問いと答え」。
- 4 Eberhard Busch: Meine Zeit mit Karl Barth(Tagebuch 1965-1968), 2011, V&R, Göttingen, S. 197.